おわりに

日韓併合について韓国では、「欧米列強以上に過酷で、地獄の苦しみを与え、類を見ないほど残酷なものだった」と教育している。研究者の中にはそうした民族史観を戒める者もいるが、決して多くない。むしろ、日本を擁護しているとみなされれば、研究者の地位を失うのが普通だ。

それでも、最近の日韓における研究の傾向は、以前と比べると大きく変化している。それは、これまで理想的だとされてきた「近代」という概念が、そこまでいいものではないことがわかってきたからだろう。

なぜ35年間の日本統治期間で、暴動や独立運動はあまり起こらなかったのだろうか？それは、近代を受け入れた朝鮮人が規律化し、日本の統治に順応したからではないだろうか。警察組織が整備され、学校教育も広がっていく中、朝鮮人にとって日本の統治は日常となり、普通に暮らしている分には問題はなかった。

しかし、日中戦争後の諸政策を見るとわかるように、朝鮮人と日本人との差異が目立つようになると、民族感情は刺激され、朝鮮人は日本への反発を蓄積させていく。

また、日本が植民地統治を通じて、協力者作りを欠かさなかったことも、統治の安定につながったにすぎない。併合当初に、皇族や閔氏政官僚などの旧エリート層を、独立運動以降は、地方の有力者や地主などを優遇して、総督府に統治の安定を図った。

だが、末端の労働者層は恩恵にあずかれず、苦しい生活に陥っていた。日本でも、財閥や寄生地主が優遇されて小作人や工場労働者に悲惨な状況であったが、植民地においてはナショナリズムと結びつく危険性もあったため、彼らは潜在的な脅威だったといえるだろう。

こうした水面下での民族感情の高まりは、優遇されていた対日協力者への恨みへと向かっていく。現在の韓国で「親日派」というのは最大の侮蔑語だというが、それも右のような事情によるのかもしれない。

もう終わったと思っている日本と、まだ終わっていないと思っている韓国。今後、両国がお互い協力し合う良好な関係になれる日は来るのだろうか？　すぐに実現することは難